

保育総合研究会
臨時

News

VOL. 1 2020. 5. 1

発行人 保育総合研究会 会長 梶沢 幸苗
発行元 事務局長 社会福祉法人 東明会
飯沼こども園 理事長 東ヶ崎静仁
〒311-3153 茨城県東茨城郡茨城町上飯沼 1276-1
029-292-6868 Fax 029-292-3831
E-mail iinuma-n@ans.co.jp

全国会員数 100名

【会長挨拶】 梶沢幸苗 広報誌「臨時 News」ご挨拶

会員の皆様、お元気ですか！日頃の保総研へのご理解ご協力ありがとうございます。

さてコロナウイルス拡散で全国に緊急事態宣言が発せられ行動の自粛が強く要請されています。保総研においても、通常の活動が制限され総会及び定例会ができない状態です。7月に福山での総会を予定していましたが、中止を余儀なくされました。会員の皆様も園や地域においてコロナ対策の対応に頭を悩ませていることとお察し申し上げます。

そのような中、保育科学研究のテレワークや、プリプリの指導計画作成に尽力いただいで

いることに、さすが保総研会員の皆様と力強さを感じております。今回、臨時の広報を出させていただいたのは、何らかの形で、少しでも会員の皆様とつながりを持ち続けられればと思った次第です。私たちが「3 蜜」状態の中で保育を頑張っているのですから、必ずや良い方向で早急に解決すると信じています。皆様！もう少しです。子どもたちのために頑張りましょう！当然ですが、ご自身の健康にも十分にご留意ください。皆様の情報をお待ちしております。

※会員の皆様へ 事務局より/保総研では、20 周年を機にまた、全国くまなく、会員募集をします。

周囲へのお声かけなど、会の周知に、今一度ご協力をお願い申し上げます。さて当分の間、定例会等が出来ない状態の中、何かしら情報を少しでも提供したいと思います。会員の中からも臨時 New への投稿等を是非とも宜しく願いします。第 1 号は 2019 保育科学のポスターを掲載します。後程総会資料等も含め、全員に郵送されていきますが、まずはお知らせします。

☆2020年 令和2年度定例会等事業予定

(コロナ感染によって延期・中止の可能性が高いと考えられます。早めに連絡をします。)

2020.7/13-14・定期総会及び第66回定例会 広島県福山市

2020.9/1-2 第67回定例会 名古屋市 東海学園大学

☆今回の情報提供 P1-2 梶沢会長挨拶

P4-6 1.2019 保育科学研究 『幼保連携型認定こども園の現場における

3歳未満の教育の質の在り方に関する研究 ～遊具環境と遊びに注目して～』

P7-8 2. コロナウィルス感染への投稿(坂崎)

「保育の力が日本を救う～「保育崩壊」をさせない施策を平時より考える～」



『幼保連携型認定こども園の現場における

3歳未満の教育の質の在り方に関する研究 ～遊具環境と遊びに注目して～』



Study on the quality of education of less than 3-year-old in the field of Centens for Early Childhood Education and Care

Fukuzawa Noriko(福澤紀子)/Kitano Sachiko(北野幸子)/Yato Seijiro(矢藤 誠慈郎)/Kikuchi Yoshiyuki(菊池義行)/
Tadano Hiroko(只野裕子)/Hirayama Takeshi(平山猛)/Kabasawa Sanae(樫沢幸苗)/Sakazaki Takahiro(坂崎隆浩)

Japan
Association of
Multidisciplinary Research for
Early Childhood Care and
Education

概要

愛着関係の確立を基盤とした乳幼児教育は、生涯にわたる生きる力の基礎を培うための認知能力、社会情動的スキルと言われる非認知能力となり、幼保連携型認定こども園教育・保育要領及び保育所保育指針に示されている「育みたい資質・能力」にもつながっていくものと考えられる。このことから乳幼児の教育環境の重要性をより具体的に示すために、全国の教育及び保育施設においておおむね共通して準備されている遊具としてのおもちゃを抽出し、乳幼児の関わりから見える発達について研究をする。その際、特に年齢によって関わる遊具(おもちゃ)の種類とその使用頻度、また関わった遊具(おもちゃ)への興味の深さや集中力を知る方法として集中した時間を測定する。同時に乳幼児の行動観察から発達過程を読み解く保育者の理解度についても研究の対象とした。

目的

全体的な人的、物的な要因の中で特に、保育の中で積み上げてきた保育の経験値に基づいて選択された遊具(おもちゃ)が子どもの成長発達を誘発する重要な道具であることを保育現場の状況を把握・観察することで、より具体的に明確化できれば、今後の保育の質の向上にも有効にはたらくものと考え物的な要因に視点をあてた。

Research 2 分析

子どもの環境への関わりパターン

番号	関係性のパターン	内容
①	子ども-遊具	子どもが自分で遊具に関わる
②	子ども-遊具-子ども	子どもと遊具の関わりに他の子どもとの関わりが生まれる
③	子ども-遊具-保育者	子どもと遊具の関わりに保育者が関わる
④	子ども-保育者-子ども	子どもと保育者との関わりに他の子どもとの関わりが生まれる

Research 1 アンケート

1. 保育環境の中で使用している遊具(おもちゃ)について使用頻度と子どもの遊びに対する集中度について
2. 遊具(おもちゃ)での遊びの中に、「主体的、対話的で深い学び」につながる育ちが見えるかを調査

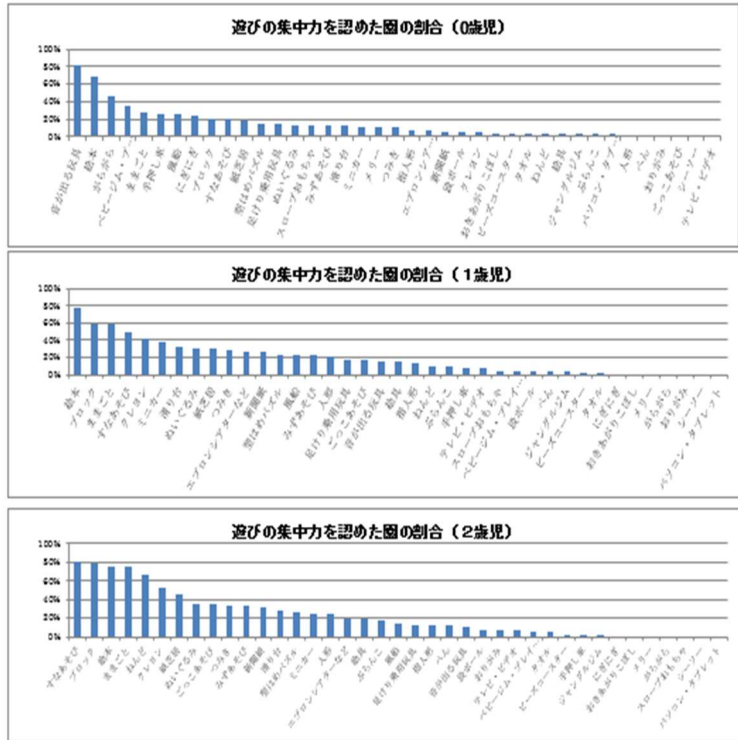
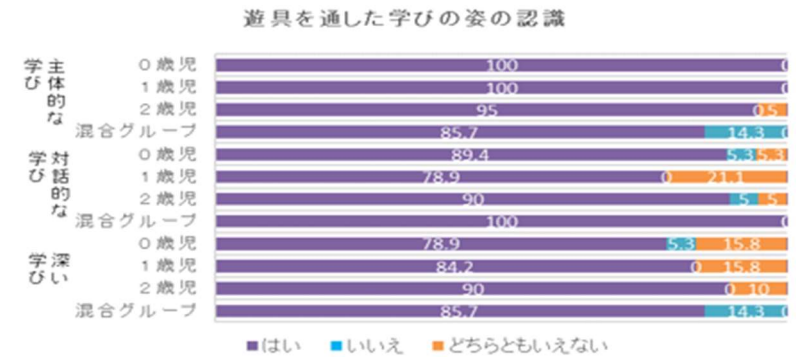
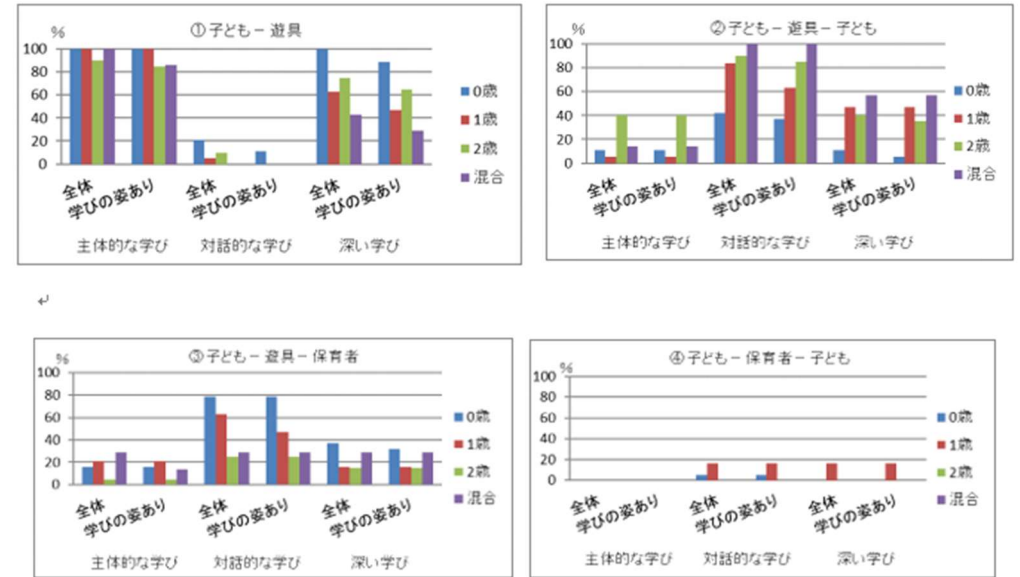


図4-1 環境との関わりから見た年齢別の3つの学び





結果

おもちゃの使用頻度と遊びへの集中度、並びに発達の視点を読み解く保育者の認知度の在り方の検証について、現場の保育者に対するアンケートを実施することで、一定の結果が得られた。研究の目的である内容についても、おおむね見出すことができたものと考えられる。

その内容は、保育の中で積み上げてきた保育者の経験値に基づいて用意された遊具（おもちゃ）を研究（実証）した結果として示されており、以前は「保育」として位置付けられていた0歳児からの保育所保育において「教育」が存在していたことを示したものといえるのではないだろうか。

まとめ

保育者は子どもの育ちに関わる専門職として、教育・保育要領に基づいて環境を設定しているが、遊具（おもちゃ）による保育環境の設定についても子どもの年齢や発達、子ども同士の関わりを考慮し意識的に行われており、子どもの学びについて読み取っていることが明らかとなった。

そういう意味で保育者は、子どもたちの発達に即した遊具（おもちゃ）をタイミングよく提供することが必要であり、月齢や年齢の差に応じることが大切である。このことから、子どもの成長発達に不可欠な物的環境である遊具（おもちゃ）をどのように提供するかは、保育経験を積み上げた保育者により、個々の子どもに育てて欲しい能力や力を把握し計画を立て、実践、評価し次へ生かせるように計画をたて直すというPDCAサイクルを回すことが必要になってくる。そこには保育者の力量がかなり重要になってくるであろう。その事は逆に、主体的、対話的、深い学びについて子どもの遊ぶ様子から学びの姿を読み取り、または読み取ろうとする保育者のスキルが大きく影響することを示してもいるのではないだろうか

2020. 「保育の力が日本を救う～「保育崩壊」をさせない施策を平時より考える～」

国難である新型コロナウイルス感染症対策には「保育界ワンチーム」で対応すべき。

3月13日の時点では、コロナウイルス感染においてに100園を超える休園状態であったが、これ以降現在も日本の全国多くの保育所・認定こども園等がこの状態の中で平時と同様に保育をしている。社会を根底から支えているのは「保育」なのである。社会全体の中心は医療や介護に向いている。もしも「医療崩壊」が起こったらその不安は計り知れない。社会にはあまり認知されていないが、同じく社会を支えている「保育崩壊」が起きたら、日本は根底から崩れていくだろうと思うのである。この時に政治や厚労省に対しても必要なものは必要として進言しながらも、情報を共有しながら官民一体となってこの国難にあたるべきだと思う。とは言え、現実には厳しい。卒園式入園式の時間短縮や中止など、各園では大変厳しい状況下の中での制約された保育がなされているのだろう。マスク等感染対策の物資も残り少ないかも知れない。保育士等が勤務できない状況にあるかも知れない。人の往来の難しさによるボランティア活動も難しい。しかしながら、有事に平時の仕事することが日本を救うと信じている。まさに今の「保育の現場」なのである。保育の現場を支えているものは、実は単なる保護者支援だけではない。「人の心」を支えているのである。人の心は社会の秩序によって守られている。信頼を失った「人の心の感染」は一時的なトイレットペーパーが無くなるという事態を起こす。この機にあたり、全国の保育者の方々に衷心より御礼を申し上げたい。しかし、保育界でもまだまだ今後どのような問題が生じるか定かではない。此度の事で施設長における危機管理の第一歩は最悪の状態を想定することだと思う。蔓延と拡散防止を基本として、罹患者が出れば最低園を2週間程度は休園することになるだろう。あらかじめ自治体と一緒にその体制を整え、その間の園の消毒問題や現実に保護者が保育出来ない園児に対する方策を考えなければならない。更に言うと閉園後の再開する保育をどう考えおくのかなど、

地域によって様々であるけれど、園長は職員とも良く話し合っておくべきであろう。ご協力いただけるご家庭や地域もあれば、そうでない場合もあるだろう。「人の心」はなかなか冷静さを保てない。だからこそ合理的な力で 社会を保つ一員に保育界がこれまで同様になっていくべきだと考える。保護者に対する早めの情報提供ともに対策を一緒に考えなくてはならない。寛容な思いで、しかし、しっかりと。

この国難に対して、第一義は人を敵と味方に分けないことだ。例えば私たち保育者であれば、対保護者、地域、自治体、都道府県等である。少し残念なのは、政府、与野党、官僚が一体となった取り組みをすべきなのではないかと思う。(確かに重要法案がたくさんあるのは解るが)真の有事に対しては、どう国を動かすのかは今後の大きな課題とわが身も含め考えるべきだ。

私は問い続ける。「保育崩壊」を起こさせない施策をきちんと考えるべきだと。保育者の志だけではすまない時もある。開けてもらわなければ困る施設であればそれ相応のお金を平素化から用意すべきであるし、それは保育の制度も含めての問題である。国内の発生状況(4月26日18:00時現在)約13000人以上の感染者(内2800人以上退院回復)、約350人の死者だ。世界を見ると約270万人人以上の感染者(内80万人の退院回復)、約19万人弱の死者数だ。考えられないほど、恐ろしい状況だ。まだ感染が少ない国もたくさんある。世界から見るとまだ始まったばかりなのかも知れない。

小中学校が休校した多くの小学生・中学生から「友達が好きだ」「勉強をしたい」「学校は楽しいところだ」と寄せられている。本当は多くの子どもたちは学校が大好きだということはどういうことなのかも知ってあげたい。

保育現場においても医療や介護施設のクラスターが他人ごとではないと思われる。保育者の皆さんの心配で不安な毎日が一刻も早く解消されることを祈るとともに、同じ保育者として皆さんに感謝とエールを送るとともに、細心の注意をはらいながら国難に対して「保育の力」を更にお願ひするものである。(保育総合研究会 副会長長 坂崎隆浩)

編集誤記

コロナは医療・介護・保育・学校などからオリンピックも始めとしてインバウンドを中心とした経済そのもの大打撃である。本当に終息するのは、当分の間難しいとしても、収縮したあとの世界をどうしていくのかは考える必要があると思う。日本は戦後から平成の長い期間、甚大な災害があったが、このようなコロナウィルス感染のような状態は無かった。戦後の人口ボーナスを背景にして、少子高齢化や大都市と過疎地という現実問題を全てにおいて制度も含めニューアルだけで済ませてきた。もうそれだけでは済まないことを今回のコロナ感染は知らせてくれている。今後のことを創造しながら新しい世界を作り上げていかなければならないと考えている。保総研は、今後「7つのプロポジション」として、新しい保育制度を検討していきたいと考えている。もちろん子どもや教育・保育を中心とした制度構築を基本にしたい。こうご期待とともに多くの人々にご協力、参加を賜りたいと思います。
※写真もなんにもなくて字だけでごめんなさいね。

この広報に対する内容については下記に電話等でご連絡を頂けると有難いです。

担 当：〒039-4222 青森県下北郡東通村砂子又大字沢内 9-35

保育総合研究会 副会長 坂崎隆浩 携帯：090-6252-3699

メール/kodomoen.sakazaki@angel.ocn.ne.jp

(こども園ひがしどおり FAX: 0175-31-0203)